

初登場のティーレマンが新しい姿で魅せる

若宮 由美 (op.257)

ベルリン生まれのドイツ人ティーレマン(59歳)が、初めてウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートを指揮。いままでザクセン国立歌劇場でジルヴェスターを振ってきた経験をもとに、ウィーンでニューイヤーに挑みます。

カール・ミヒャエル・ツィーラー：〈シェーンフェルト行進曲〉 op.422

Carl Michael Ziehrer: *Schönfeld Marsch*, op.422

ツィーラーはディアナザールでデビューし、ダンス音楽の分野で名を成します。1885年には「ホーホ・ウント・ドイチュマイスター」の楽長。1907年には、シュトラウス家の後任として宮廷舞踏会音楽監督を引き継ぎ、オーストリア=ハンガリー帝国の終焉を迎えるまでその職にありました。この曲は、オーストリア参謀幕僚であったアントン・シェーンフェルト男爵に献呈されたものです。一般への初演は1890年10月16日にウィーンのシュターレーナーで行われました。概して、聴衆の手拍子とともに演奏されます。

ヨーゼフ・シュトラウス：ワルツ〈トランスアクツィオネン〉 op.184

Josef Strauss: *Transactionen, Walzer*, op.184

1865年のカーニバルに頭の病気の前兆が現れます。この曲は夏の休暇から戻った8月2日にフォルクスガルテンで開かれた慈善演奏会で初演。話は変わりますが、病に悩み続けたカーニバルの頃、〈法的措置〉 op.174 というワルツを初演しています。この原題は“Actionen”。彼はこの曲のことが頭から離れずにいたため、その反作用の意である〈トラスアクツィオネン〉をこの曲に用いたと考えられています。辞書では「株式取引」に関する用語ですが、この場合はもっと広い意味が込められています。

ヨーゼフ・ヘルメスベルガー2世：〈妖精の踊り〉

Josef Hellmesberger(Sohn): *Elfenreigen*.

ヘルメスベルガーは父ヨーゼフ1世も同じく音楽家で、父の設立したヘルメスベルガー四重奏団に1875年より加わり、84年に宮廷歌劇場のバレエ監督、90年にはウィーン・フィルハーモニーのコンサート・マスターを経て、マーラーの後任として1903-05年にウィーン・フィルの指揮者を歴任。この曲はメンデルスゾーンを想起させる標題音楽的な作品。

ヨハン・シュトラウス2世：ポルカ・シュネル〈特急ポルカ〉 op.311

Johann Strauss (Sohn): *Express, Polka schnell*, op.311

1866年はハプスブルク帝国にとってケーニヒツグレーツの戦いでプロイセンに負けた屈辱的な年でした。新作の発表を晩秋まで見送り、11月18日にフォルクスガルテンでの「ヨーゼフとエドゥアルト・シュトラウスの演奏会」(慈善演奏会)を開催し、ヨハンはこの作品を初演しました。後に、アントル・ドラーティのバレエ《卒業舞踏会》(1940)の〈グランド・ギャロップ〉(第12曲)に引用されました。

ヨハン・シュトラウス 2 世：ワルツ 〈北海の絵〉 op.390

Johann Strauss (Sohn): Nordseebilder, Walzer, op.390

主治医の勧めもあり、結婚したばかりの 2 番目の妻アンゲルカと 1878 年と 79 年の夏に北海に旅行に出かけました。夫妻は干潟で有名な北フリースラントを旅して、79 年にはフェール島のヴィクという小さな町に逗留。そこで、干満差の大きい海の様子から音楽的着想を得ました。79 年 11 月 16 日にウィーン楽友協会の日曜コンサートにおいて、エドゥアルトの指揮で初演。ヨハン自身の指揮は 79 年 11 月 30 日に同じく楽友協会でした。

エドゥアルト・シュトラウス：ギャロップ [ポルカ・シュネル] 〈速達郵便で〉 op.259

Eduard Strauss: Mit Extrapost, Galopp [Polka schnell], op.259

エドゥアルトは、1870 年の次兄ヨーゼフの亡き後、シュトラウス楽団を一手に引き受け、いつもの演奏会場のほか、しばしば演奏旅行に出かけました。87 年には南ドイツへ出かけ、10 月半ばに帰郷。ウィーンに戻って初の「シュトラウス日曜コンサート」が同月 23 日に楽友協会で開催され、旅の思い出を込めて同ポルカが初演されました。

ヨハン・シュトラウス 2 世：オペレッタ 《ジプシー男爵》序曲

Johann Strauss (Sohn) : Overture zur Operette Der Zigeunerbaron

《ジプシー男爵》は 1885 年 10 月 24 日、すなわち 2 世の 60 歳の誕生日前日にアン・デア・ウィーン劇場で 2 世の指揮で初演。11 月 8 日の演奏会では序曲が呼び物となりました。

ヨーゼフ・シュトラウス：ポルカ・フランセーズ 〈踊り子〉 op.227

Josef Strauss: Die Tänzerin, Polka française, op.227

1867 年はパリで万博が開かれ、すべての視線がそこに惹きつけられました。ヨーゼフはウィーンの留守を任せ、5 月 30 日には「ノイエ・ヴェルト」で演奏を始めるつもりでしたが、あまり寒すぎて延期。6 月 2 日に初演。題名もあってパリ気分を盛り上げたものの、ヨーゼフは 8 月にバート・フーシェへ夏のバカンスに出かけ、この曲も名を消しました。

ヨハン・シュトラウス 2 世：ワルツ 〈芸術家の生活〉 op.316

Johann Strauss (Sohn): Künstlerleben, Walzer, op.316

復活祭前の「四旬節」には祝祭を控える習慣があり、「四旬節」直前の「謝肉祭」に人びとは羽目を外して騒ぎます。ところが、1867 年は前年夏にオーストリアが敗北した影響で世相は暗く、多くの舞踏会が中止となりました。そうした中で、シュトラウス兄弟はウィーンの人びとを勇気づける作品を世に送り出します。2 月 18 日の舞踏会で初演されました。これは〈美しく青きドナウ〉初演の 3 日後であり、初演場所はディアナザールでした。

ヨハン・シュトラウス 2 世：ポルカ・シュネル 〈インドの舞姫〉 op.351

Johann Strauss (Sohn): Die Bajadere, Polka schnell, op.351

ヨハン 2 世の最初の劇作品は《インディゴと 40 人の盗賊》となりました。アラビアン・ナイトを模した大雑把なおとぎ話で、1870 年 2 月 10 日にアン・デア・ウィーン劇場で初演。その批評は賛否両論でした。このオペレッタに基づく〈インドの舞姫〉は 5 月 28 日にシュピーナから出版され、6 月 16 日にフォルクスガルデンでエドゥアルトにより初演。

エドゥアルト・シュトラウス：ポルカ・フランセーズ〈オペラ座の夜会〉 op.162

Eduard Strauss: *Opern-Soiree, Polka française, op.162*

1877年12月11日、新しい宮廷歌劇場で初めての舞踏会が開かれました。兄ヨハンにとってウィーン・フィルを指揮する2回目の機会でしたが、《メトゥザレム王子》に時間を取られ、新作が間に合わず、ポプリ〈古いウィーン、新しいウィーン〉を演奏。その後を受けて、楽団もシュトラウス楽団に代わり、エドゥアルトがこの曲を初演しました。皇帝が「宮廷歌劇場はダンスには向かない」と述べたことが伝わっています。

ヨハン・シュトラウス2世：〈エヴァ・ワルツ〉（《騎士パースマーン》の動機による）

Johann Strauss (Sohn) : *Eva-Walzer. Nach Motiven aus „Ritter Pásmán“.*

1892年1月1日に宮廷歌劇場で初演された《騎士パースマーン》は、ハンガリー王と騎士パースマーンのドタバタで、成功は遠い夢となりました。それでも、選抜曲は出版社ジムロックの儲け話になるもので、とくに第2幕のパースマーンの妻エヴァが歌うワルツは美しい旋律でした。1月3日にゾフィーエンザールで第19歩兵連隊の楽団、そしてヒーツィングのフォーゲルロイター・ホテルで第69歩兵連隊が初演。これらの初演はヨハンの知らぬところだったでしょう。編曲については、その後も両者の間でもめています。

ヨハン・シュトラウス2世：《騎士パースマーン》のチャールダーシュ op.441

Johann Strauss (Sohn) : *Csárdás aus „Ritter Pásmán“, op.441*

喜劇オペラ《騎士パースマーン》のうち、〈エヴァ・ワルツ〉とバレエ音楽だけは評価されました。第3幕のバレエ音楽は「ポルカ」「ワルツ」「チャールダーシュ」と徐々にテンポが速くなっていくようになっています。チャールダーシュはハンガリーの民俗舞踏で、テンポの遅い部分「ラッシュー」と速い部分「フリス」の2つの部分から構成。作曲者自身が、「チャールダーシュは成り行きにまかせて自由に作った」と述べています。

ヨハン・シュトラウス2世：〈エジプト行進曲〉 op.335

Johann Strauss (Sohn) : *Egyptischer Marsch, op.335*

1869年夏パヴロフスクに赴いた2世は、ヨーゼフと交替で駅舎コンサートを指揮しました。同曲はここで7月6日に初演。ところが、初演時の題名は「チェルケス行進曲」（「チェルケス」はコーカサスの少数民族）。ウィーンでも同じ題名で出版準備が進められましたが、11月16日のスエズ運河開通に因んで改題されました。初版譜の表紙には、ピラミッドとエジプト総督イスマイル・パシヤのパレードが描かれています。

ヨーゼフ・ヘルメスベルガー2世：〈幕間のワルツ〉

Josef Hellmesberger(Sohn): *Entr'acte Valse*

宮廷歌劇場での仕事が多かったため、劇の音楽に慣れ親しんでいました。これもその種の作品のひとつです。しかし、女性スキャンダルによって順風満帆な人生は崩れました。

ヨハン・シュトラウス2世：ポルカ・マズルカ〈女性讃美〉 op.315

Johann Strauss (Sohn) : *Lob der Frauen, Polka mazur, op. 315*

1867年のシュトラウス家の関心事はパリ万博で成功を収めることでした。この曲は、同年2月17日にフォルクスガルテンの「ヨーゼフとエドゥアルト・シュトラウスの演奏会」で

ヨハン自身の指揮で初演。しかし、パリではさほど気に入られず、その後のロンドンで成功をみせました。初版表紙には、シラーの〈女性の品位〉が引用されています。「女性をほめたたえよ！この世の生のために、彼女らは天国のばらを編み、織り上げるのだ！」。

ヨーゼフ・シュトラウス：ワルツ〈天体の音楽〉 op.235

Josef Strauss: *Sphärenklänge*, Walzer, op. 235

1868年ヨーゼフは医学舞踏会の音楽監督に再任され、1月21日のゾフィーエンザールでの舞踏会に同曲を献呈しました。通常、献呈曲には主催者と関連のあるタイトルを付す習慣がありましたが、同曲には医学と無関係のタイトルが与えられました。当時の新聞評には、「タイトルに比べれば、このワルツのメロディーはずっとよい」と書かれています。

ヨハン・シュトラウス2世：シュネル・ポルカ〈突進〉 op.348

Johann Strauss (Sohn) :*Im Strumschrift!*, Schnell Polka, op. 348

《インディゴと40人の盗賊》を1871年に初演します。〈突進〉はこのオペレッタの動機を用いて構成された楽曲。5月19日にフォルクスガルテンで開かれた祝賀コンサートにおいて、エドゥアルトの指揮で初演されました。